

80年代の世界政治の展望

勝 部 元

80年代の展望の前提となる歴史的推移についてはすでに報告したので（「戦後国際秩序の動向と現段階」研究所報第4巻2号）今回はその前提となる理論的諸問題についてのレジュメをまとめておく。

80年代については、「不確実性の時代」とか、「混迷の時期」とかいられている。

しかしいろいろな錯雑した要因が重層的に交錯し、これまでのように簡単な展望を許さないのは事実であるが、果してそれは、予知不可能な「混迷」と「不確実」な時代であろうか。私見によれば、単純な教条にもたれかかる薄弱な精神からは「混迷」し、「不確実」とみえるかもしれないが、じっさいはまったくそうではないのではなからうか。新しい時代を新しい尺度をもってはかるなら、展望はけっして不明確なものではない。むしろ「混迷」し、「不確実」なのは、論者自身の頭脳であり、古い尺度をもってすれば、「頭をかかえこんで」困惑したり、「不明を告白」したりせねばならないが、新しい尺度にてらすなら大まかな展望は可能なのではなからうか。

それならば、科学の基本的立場に忠実に、新しい歴史的現象にそれに適応する新しい尺度を適応すればどうなるであろうか。そもそもわれわれが依存すべき新しい尺度をどのように探究すべきであろうか。以下、簡単にわたくしの、この80年代展望のための新しい尺度探究のレジュメを、記す。このレジュメの全面的展開は今後若干の時日を必要とするだろう。

一 資本主義世界にかんして

前項の「戦後国際秩序の動向と現段階」で一寸ふれておいたように、70年代以降、現代資本

主義世界において、著しい変化は、多国籍企業（世界企業）の驚くべき発展である。もはや現在では一国の（たとえばアメリカの）生産・貿易の比較はあまり意味のないといわれるまでの発展度に達している。アメリカについても個々の重要商品について多国籍企業全体の数字を加えてみると一国の生産・貿易の三倍、五倍に及んでいるからだ。現在世界のGNPの六分の一が多国籍企業によって生産され、またこのままですすむと1985年には約400の多国籍企業が資本主義世界全生産の90%を占めるだろうと、いられている。

こうみえてくると、銀行、国際通貨、石油、食料、原子力をはじめ重要企業をますます急速に傘下に収めつつあるこの多国籍企業の分析なしに、資本主義世界の動向の推定は不可能となった、といってもいいすぎではなからう。もちろんそうだからといって各国の国民経済や各国単位の帝国主義対立が全然なくなった、というわけではない。しかし20世紀前半にそうであったように「組織された資本主義」、「超帝国主義」という分析視角がまったく誤りとはいえない新しい歴史的時期が始まっていることはたしかだ。

このような世界資本主義の経済構造の変化は政権構造にも大きな変化を与えている。ここにも世界企業に対応して、ルーズな形での国際権力的なものが想定できる。そしてロックフェラー・ロスチャイルド連合を中心に各国のもっとも主要な企業（財界主流）を結合したこの無気味な構成体（そのほんの露頭が米・日・欧・三極委員会であろう）が追求されねばならないであろう。食料・石油をはじめとする資源問題も金価格・各国通貨の価値の急変も、分析のメスをこの世界企業の奥殿の秘密の決定にまで辿ら

ねば、真の意味は明らかにならない。もちろんここに多国籍企業間の対立や軋轢があり、それはそれでまた政治的表現をとることはいうまでもないが。

二 社会主義世界にかんして

ここ20年来の中・ソ抗争、ベトナムのカンボジアへの侵略、中国・ベトナム戦争、さらにソ連のアフガニスタン侵略は、社会主義の既製概念をふきとばした。「現存社会主義」(バーロ)は、生産力発展のテンポでも、国内の所得較差でも、新しい支配層乃至「新しい階級」の出現という経済的下部構造の点でも、政治的自由や文化的自由という上部構造の問題でも、これまでの輝かしいタテマエを裏切ってホンネを露出している。

われわれはこの事実を事実としてはっきり認め、そこから出発せねばならない。冷戦期の資本主義＝戦争勢力、社会主義＝平和勢力という善玉、悪玉図式はもはや通用しない。現象的には資本主義的帝国主義とほとんど変りないこの社会主義的「帝国主義」(レーニンのひそみになって各歴史的段階における帝国主義を考えるなら、この用語の使用も妥当でないことはなからう)の実体は何であろうか。この考察については、いま本格的探求が始ったばかりであるから(もちろんトロッキーやジラスの先駆的業績はあるが)展開にはより多くの時間が必要であろうが、¹⁾ 少なくとも「勢力圏」,「権力政治」,「権力欲」,「国益」といったこれまでマルクス主義者が資本主義世界にのみ適用してきた概念を「現存社会主義」に適用せねばならないだろう。

1) 中国は例の「三つの世界論」の中で、ソ連を、まったく資本主義に後退し、資本主義的帝国主義になった、と規定していたが、さいきんでは、このような論証ぬきの規定は誤りであった、としている。しかしソ連の現在の世界政策の侵略性については、もっとも危険な敵対者として警告しながらも、それではソ連は如何なる体制か。この「ニセの社会主義」をどう規定し、その侵略性の経済的基礎をどこにもとめるか、については不明である。わたくしは79年12月初来訪した社会科学院副院長官郷氏を団長とする訪日団のメンバー、とくに施谷世界政治研究所長に上述の点をといつめたが、結局「わかりません」という答えしか得られなかった。

それは「現存社会主義」が恐らく資本主義的に成熟しない後進地域に成立し、「スターリン主義」という独得の独裁的全体主義に多かれ少かれ毒されたことによって、「歴史的伝統」,「おくれた意識」を今尚色こくひきずっていることから生れてきた現象だろう。

この問題と関連して第(一)能率の悪い官僚的中集権的経済経営の代替として、ユーゴ型の「自央主管理」がさかんにいわれ、さらにフランス社会党や日本社会党の一部にとりあげられ、理論家たちが一斉にそれを聖像としてあがめているようである。しかしそれはそれとして、この労働力の創造性をもっともよく組織し、発揮させるという方式はじつにユーゴでもそれ程成功していないで、驚くべきことにもっとも成果をあげているのは資本主義日本であった、ということがあまり気づかれていないのではないか。資本主義、社会主義をとわず、もっとも注目されている日本経済躍進の秘密が、高度な技術の導入、終身雇用制などの他の要因とからみあって「技術の改善」,「生産性の向上」に生きがいを感じ、全力を投入している日本の先進的エンジニアや労働者であったことが気づかれていないのではないか。すなわち「企業一家主義」と「仕事の虫」がこれである。いろいろな点で教えられるところの多かった長谷川慶太郎氏の「80年代経済のよみ方」(祥伝社)を読んでみて、おそまきながら、わたくしは、はたとこの点に思いあたった。にせものでない「ほんとうの社会主義」は、マルクスがかつて想定したように「資本主義のもっとも発達したところ」から生れる。だから真の社会主義体制はいわゆるブルジョア民主主義をこれまでのように全否定するのではなくて、止揚したところに生れるべきである。真の社会主義はまだ存在せず、今後あらわれるであろう先進国社会主義(ユーロコミュニズム)こそそれにあたるのではないか、というのが年来のわたくしの見解である。だから、資本主義にブルジョア民主主義とファシズムの形態があったのにたいして、社会主義も先進国社会主義と後進国社会主義(現存社会主義)がある。これまでいっばんに資本主義のブルジョ

ア民主主義的形態と社会主義の「ファシズム」的形態（現存社会主義）を比較し、非合理的に、無理矢理に後者の前者に対する優位性を信仰してきたのではなからうか。これはレーニンに端を発するが、スターリン主義治下では極端に歪曲されてきた。このような古い「信仰」と手を切って「事実を事実として」、「現存社会主義」を分析すべきであろう。第(二)に、アフガニスタンへのソ連の侵略以降、冷戦復帰が叫ばれ、わが国においても安全保障問題が意識的にとりあげられつつある。この場合でも内外支配層の巧妙なカンパニアにだまされることなく²⁾ また社・共など革新政党に特徴的な古い教条で応戦しようとすることなく（これでは勝負ははじめからみえている）新たな視角から、現在いかなる国でも絶対的な安全保障はあり得ず、それは相対的なものであること、アジアの日本やヨーロッパ先進国では戦争にまきこまれた場合は国民の死滅につながる破局となること、という冷厳な真理をふまえながら、現在世界の緊張緩和のために如何なる措置をとるべきか、という見地から問題をたずねねばならない。イタリア共産党が権力を握っても敢えて急激に NATO から離脱しないと公言しているのも、一つにはそうすれば東西の力のバランスに急激な変化をおこさせ、逆に緊張を激化させるという理由からである。またもう一つにはアメリカ帝国主義からだけでなく、チェコの例にみるようにソ連の「帝国主義」的軍事侵略をこむむりたくないという意図から生れたものであることに留意する必要がある。

(三) 第三世界について

2) そのための思想的前提はすでに着々と準備されている、まず日本は条件降伏か無条件降伏かという文学界での江藤・本多論争（無条件降伏とは「平和を取り引きしない」「条件を連合国が一方的に押しつける」という国際政治学者には常識的な問題を江藤氏はわざと意図的にねじまげ、ポ宣言による「条件降伏」であるとしている。ついで戦争と平和をめぐる森島・関論争（ヒトラーが侵略しなかったのは、スイスが強固に武装していたためとか、イギリスのチェンバレンらの平和思想のためとかいう、核兵器の現状とはまったくかけはなれたところでの論争である）が行なわれている。

第三世界における民族独立闘争はさらに複雑な形で火をふき、植民地主義はついにアフリカの南端ローデシアでも崩壊しつつある。これは80年代世界の展望の重大不可欠のファクターといえる。この分野では (1)エチオピア、アンゴラ、南イエメン、アフガニスタンなどのソ連支配下の社会主義指向国をどのように規定し分析するか。またリビアのような国を同様にどうみるか、ということとイラン革命以降のイスラム・パワー噴出の分析と展望であろう。後者についていえば、たとえばホメイニ治下のイランは決して封建的反動への復帰を求めているものでなく、反米反ソでありながら、それなりの「自主的」近代化の道を進みつつある、とみられる。

さいごに、中国の「文革」否定以後やや影がうすくなりつつあるとはいえ、今なおとくに文学者やスマートさをもって売ってきた技術評論家などに根強い「近代文明崩壊論」「人類滅亡論」式の悲観主義についてである。

わたくしは公害、環境汚染、エコロジー、遺伝子組替等、人類危機の源となっているのは科学・技術の発達や生産力の発展のためでなく、まさに後期資本主義と前期（現存）社会主義という体制のためである、と思う。論証ぬきに人類の危機を悲嘆するのは少くとも科学者のとるべき態度ではない。人類は科学・技術の発展と生産力の発展にもっと大きな夢をかけるべきだと思ふし、そのために絶望や悲観主義におちいることなくよりよい体制を求めて既存両体制と戦うべきだと思ふ。

結論的にいうと80年代は重層的危機がさらに激化する時代となろう。ヨーロッパにおける先進国革命が、第三世界における民族革命を同監者としさらにそれが現存社会主義の変革（チェコの68年はその先駆者である）をもたらして行くのではなからうか。もちろんそのためには先駆的プロレタリアートは資本主義的帝国主義と「社会主義的」帝国主義の「二つの敵」との死をかけた闘争が必要であろうが。